

〈論文〉

現代における体験的学習の教育的意義  
— 体験的学習の実践的考察をもとにして —

常磐大学人間科学部 森山賢一

本研究は、体験的学習の現代的意義について述べたものである。近年、各教科、道徳、特別活動のなかで体験的学習を取り入れた授業が増加傾向にある。さらに2002年度からは新学習指導要領による「総合的な学習の時間」のスタートによって一層、学校教育のなかで体験的学習が積極的に取り入れられるようになった。

このように学校教育において、重要な学習方法として取り入れられている体験的学習について現代の子供を取り巻く社会的背景の分析、考察を踏まえながら、現代における教育的意義について考究した。

キーワード 人間形成 Menschenbildung (Ger.) 人間性 Human nature.  
即事性 Sachlichkeit (Ger.) コミュニケーション Communication.

1. はじめに — 体験的学習と現代社会 —

我が国の学校教育の現状は、残念なことに「混迷」であるとか「危機的状況である」などといわれ、多くの人々が危機感を抱くようになってきている。それは画一的な受験戦争、偏差値教育、高学歴主義、学校の中では学級崩壊、校内暴力、さらに不登校、自殺と非常に多くの深刻な問題を抱えている。高等学校においては、高校進学率96%という実質上の義務教育化の中で生徒は、知識習得に偏ったカリキュラムによって学校や学習に興味を失っている。このことは中途退学者の激増を招いているのである。

また近年は社会的背景も大きく変化してきた。戦後驚異的ともいえる変化をもたらした我が国の産業社会においては、第1次産業の比重が激減し、第3次産業が増加した。このような産業構造の変化は、日常生活や職場でも仕事の質を変化させ、さまざまな機器の導入によって肉体的労力よりも知的操作へのウエイトが置かれるようになったのも事実である。

さらに子どもの生活環境も大きく変化した。特に、家庭や地域社会において子どもが自ら物を作ったり、生き物を育てたりすることや、家の手伝いなど働くことに関連の深い活動の機会が非常に減少していることも指摘されている。

以上のように我が国の子どもの教育を取り巻く社会的背景は、子どもの成長にとって必ずしも望ましいものではないのである。このような状況のもとで学校教育においても、近年特に体験的学習が強調され、新しい学習指導要領による「総合的な学習の時間」の実施をはじめとして各学校でさまざまな取り組みがなされている。

本稿においては体験学習の実践活動の場面の分析を通して、現代の我が国における体験的学習の必要性、つまり今日的意義について実践的考察を行うものである。

2. 「豊かな体験」から「豊かな人間性」を育む

今日、教育が「人間疎外」に加担し、人間不在の教育に陥っている。特に進学競争の激化に伴い「人間性」の育成が非常なほどに軽視されている現状にある。

このような状況の中で、昭和46(1971)年6月の中央教育審議会答申を踏まえた昭和51年の教育課程審議会答申は、「教育課程の基準のねらい」として、「人間性豊かな児童生徒を育てること」

を、まず第一にあげている。また、昭和59（1984）年に設置された臨時教育審議会は、その第2次答申（昭和61年4月）において、「21世紀のための教育の目標」を示しているが、そこには第一に「ひろい心、すこやかな体、ゆたかな創造力」が掲げられている。これを受けた教育課程審議会も、「教育課程の基準の改善方針」（昭和62年12月答申）において、第一に「豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること」を掲げている。

また今後の我が国の教育の在り方を示した第15期中央教育審議会第1次答申（平成8年7月）においては、「これからの子供たちに必要となるのは、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性である」と提言しており、これはより具体的に「他人を思いやる心、生命や人権を尊重する心、自然や美しいものに感動する心、正義感、公德心、ボランティア精神、郷土や国を愛する心、世界の平和、国際親善に努める心」と示されている。

さらに平成9（1997）年11月の教育課程審議会中間まとめにおいても、「教育課程の基準の改善のねらい」の大きな柱に「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」が掲げられている。

要するに、このような近年の「豊かな人間性」を教育の在り方の中核とする方向性は、現代の教育における「有能性への極端な偏り」から「人間性の回復」への転換の必要性を示したものであるといえる。

体験的学習の実践では、最近の児童、生徒は日常生活の中で体を使って行動する機会が少ないことが明瞭に写し出され、生活経験の貧困化は深刻な問題であった。このような中において、米づくりや、野菜作り、草花の栽培、自然観察、サラダパーティー、篠笛づくりなどを通じた体験的学習は、子どもの生き生きとした学習活動を可能にし、子どもたちに「体験の広がり」をもたらした。そこでは学習内容が生活にかかわっており体を通して学び、体で感じる授業が展開された。

このような学習過程の中で子どもたちは、共同活動によって一丸となり、自分のクラスやクラスメートに誇りを持ち、楽しみながら共に助け合い、お互いに励まし合って学ぶ姿がみられ、随所で人を思いやる場面も見受けられた。

要するに、自己の所属する集団に所属感、連帯感を持ち、この集団生活の向上のために進んで力を尽くそうとする自主的、自立的な実践的態度を養うことによって各自の果たす役割や他者と協力することの重要性を理解していくことが体験的学習の持つ今日の大きな教育的意義なのである。

平成10（1998）年7月に財団法人社会経済生産性本部の社会政策特別委員会から出された、教育改革に関する中間報告書「選択・責任・連帯の教育改革」においても、改革の基本的考え方として学校の教育機関として機能しない原因が「連帯の欠如」にあると分析している。このことはさきに述べた子ども同志の信頼関係のみならず、教師と子どもの信頼関係も同様であるといえる。今こそ学校教育において教師と子どもとの間の信頼関係が回復されなければならない。この「信頼・連帯」の確立については、体験的学習の実践を踏まえ、新しい教育の在り方を示すことによって可能となるであろう。

### 3. 学校・家庭・地域の連携と体験的学習

よりよい体験的学習を実践していくためには、学校、家庭、地域の協力、連携が必要不可欠なものとなる。これまでの体験的学習の実践においてもさまざまな教師の工夫がみられる。以下に実践例の場面を1. 2点あげて考えてみたい。

例えば米づくりを通じた体験的学習では、米という教材の選定によって家族と子どもとの間の

コミュニケーションの深まりをみることができた。近年、親と子どもとの会話は少なくなっている傾向にあるといわれ、特に学校での出来事など家庭に帰って父母との会話の中では極めて少ないようである。

こうした状況の中での子どもの家庭でのコミュニケーションの増大は、大きな意味を持つものである。さらに家庭との連携を深めていくためには、計画段階の時点からその展開する体験的学習の学習目的や、ねらい、学習方法、学習形態、さらに終了後の結果等を適時、家庭に伝達し、更なる理解や協力を求める工夫が必要である。

また、小学校生活科の「野菜を育てよう」という単元での体験的学習の取り組みの中で「農家のおじさんをたずねる」という場面が設定されていたが、担当教師が自ら学校の校区を实地踏査し、地域社会の把握につとめ地域に根ざした教育を行っている。

要するに、体験的学習をより充実した学習活動として展開するためには、教材としての自然環境や社会の事実、事象の良否が大きな鍵を握っている。教師は日頃から自分の足で地域の身近な素材である事物を収集したり、地域の人々との交流を通して教材となり得る事物などを選択し、地域に根ざした教育を行わなければならない。つまり、素材の教材化も体験的学習の重要な問題である。

言うまでもなく学校は、地域社会の一員であり、地域社会に開かれた存在でなければならない。体験的学習の充実した展開のためには、学校、家庭、地域社会の有機的な連携をより一層推進しなければならない。このことは生涯学習との関連においても考えられなければならない。

#### 4. 体験的学習をめぐる教育実践上の課題

現在の学校教育において体験的学習を推進し、定着させるにあたっては、実践上の問題について考察、吟味していく必要がある。この実践上の問題については教育課程上、体験的学習をどのような位置づけで、どのように進めていくかという問題や、実際に学校ではどのような計画を立て、どのような指導体制、学習方法、学習形態によって展開していくのか。さらに現代の子どもを取り巻く複雑な社会的状況のもとで、どのようにして子どもたちに働きかけていくのか。

また体験的学習の実践の上で、その場面としての施設、設備、予算などの問題、人材の問題、さらに体験的学習が教育活動である以上、評価の問題も大きな課題であるといえよう。

今述べてきたように、体験的学習の実践にあたっては、多くの問題点、課題をあげることができるのであるが、これらのいくつかの問題の中で、生徒への働きかけの問題について、高等学校の生徒を中心として、現代の子どもを取り巻く環境について整理し、これまでの実践活動を通しての考察も踏まえ吟味してみたい。まず、高等学校の生徒のおかれている社会的背景を考えてみることにする。

近年における産業構造の変化と、経済の著しい発展に伴い、教育への関心も高まりを見せ、現在の日本の教育は、学歴社会への対応による過激な受験戦争に陥っている。入学試験、受験戦争の問題は、単に入試の問題であるだけでなく、学校制度の問題、社会の問題に深くかかわっている。幼稚園から始まって、小学校、中学校、高等学校、大学まで、ひたすら入学試験を受け、上の学校へ進学しなければならないという現状にあるから、知識偏重の教育に陥るのである。この社会的悪循環は、常に批判を浴びながらも一向に変わっていないのである。

このような状況から生徒、保護者においても、「実験・実習よりも受験勉強を。」「体を動かすことは嫌い。」「体験的学習をしても受験戦争に勝利をおさめ、エリートになることはできない。」などといった、多くの体験的学習への批判的な意見が出てくるのは事実である。しかしながら、この一連の受験競争によって、児童、生徒にさまざまな弊害（ノイローゼ、過度なストレス、落

ちこぼれ、人間性の喪失・・・など)が起こっており、長期欠席者数の増大、特に高等学校では、学校生活不適應や、学業不振などによる中途退学者の激増の問題が深刻となっている。

また、前に述べたように今日の高等学校においては、中学校卒業生のほとんどが高等学校への進学を希望し、入学をしてくる。このため、さまざまな特性を持ったり、多様な進路を希望したりする生徒が激増しているのである。さらに、偏差値の低い普通高校や、専門高校(工業、商業、農業、水産などの高等学校)などでは中学校から偏差値によって振り分けられた結果、入学しても学校生活、特に学習に対して無気力な生徒が多い。このような子どもを取り巻く厳しい教育環境の中で、生徒たちにどのようにして学習に関心や興味を持たせていくのか、本当に大きな課題である。しかしながら、こうした状況であるからこそ体験的学習を通した、生徒への働きかけが必要不可欠なのである。

中学校の進路指導で偏差値のみによって区切られ、専門高校に入学した生徒の中で、学校生活や学習に対して無気力だった生徒が、学校の授業での実験、実習などの、体験的活動を通してやる気を起こし、学習に積極的に取り組んで充実した学校生活を送って卒業しているという話もよく耳にすることである。

生徒は元来、体を動かすことが好きであり、物を作ったり、植物を栽培したり、動物を飼育する喜びを深く味わいたいのである。このようにみえてくると、大人たちの現代の児童、生徒(現代っ子)に対する先入観がどうも間違っているようにも思えるのである。教師はもちろんのこと、大人たちは誤った、子どもに対する先入観、偏見をまず捨て去るべきである。

また、米づくりを通した実践活動を行う中で、「僕はいつも授業の時にはあまり勉強ができず、みんなからバカにされそうで本当にいやだった。でもこの授業では僕のいい所を出せたような気がする。」や、「俺はいつも不真面目だが、この授業は一生懸命頑張ったと思う。女子たちから『いいところあるね』といわれた。」という生徒自身の率直な感想が得られた。

要するに学校、家庭、さらに社会などにおいて、俗に劣等生であるとか、問題児であるとか言われている生徒への働きかけには、どのようにして働きかけるか、どのような動機づけが必要かなどと言うことに対して十分な注意を払いながら、体験的学習を推進することが重要である。これらのことを踏まえ、教師が生徒たちに大きく働きかけを行うことによって、子どもたちの学校生活をよりよい方向へと導いていけるのである。生徒への働きかけの問題では、教師を主軸とした大人たちの体験的学習への取り組む姿勢と、指導力などの力量が重要なのである。

さらに体験的学習の実践においては、体験の機会や場所などは子どもたちにとって同じに与えられるが、体験の中身は一人一人の子ども自身の体験であるため、それぞれの子どものよって感じ方も異なれば出くわす場面も広がりにも富むのである。つまりこのことは、体験的学習では体験の内容が一人一人の子どもの主観的な要素に委ねられるため、同一の活動であっても子どもによって異なってしまうことを意味する。要するに教師は、子ども一人一人にできる限り目を配り、観察し、その個性の尊重を最大限に考慮する必要がある。

また体験的学習は、学校教育において教育の効率の観点からみれば多くの時間や労力を要することは疑いようもない事実である。さらに教師による周到なプランが導かれなければ、子どもの実り多き学習は望めないのである。

しかし現代の子どもたちは、直接体験の機会の極めて少ない中で、多くの間接体験によって生活している。このことを考えれば体験的学習による直接体験は、子どもの学習活動において現代では特に重要視されなければならないのである。

#### 5. おわりに—教師の意識改革と体験的学習—

最後になったが、言うまでもなく体験的学習の実践においては特に、学校全体、教師全体、教師集団の教育への情熱や生徒への愛情、教師間の共通の努力が重要な要素である。

ランゲフェルド (M. J. Langeveld, 1905～) は、教師について、「人生や人間同士の人格的接触についての解説者でなければなりません。そして正にこの究極目的のためにこそ、彼はまた、客観的諸事実の発見とその再構成に関しても、あるいは諸々の技能や知識体系の発見的学習に関しても、常に子どもを鼓舞してやまぬ良き道案内でなければならないわけです。」と述べているが、教師自身が体験的学習についてしっかりとした認識の上に立ち、率先して取り組まなければ一歩の進展もあり得ない。このためには、実践的研究を重ねることや、教師の研修への取り組みも不可欠であると思われる。